

シンポジウム

2026年10月17日(土) 15:30～17:00 | 第3会場

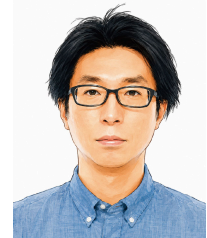
[SY5] シンポジウム5 「がん治療のバトンを地域でつなぐ ～病院、薬局、そして薬局間連携で築く、外来がん治療の未来～」

座長兼オーガナイザー:足立 昇平(総合メディカル株式会社 さくらファーマシー薬局 管理薬剤師/外来がん治療専門薬剤師)

座長:高橋 郷(国立健康危機管理研究機構 国立国府台医療センター薬剤部 副薬剤部長)

[SY5-2] 薬剤師外来の取り組みと薬局との連携

片岡 憲昭(大阪医科薬科大学病院 薬剤部 主任)



外来がん薬物療法の進歩により、多くの患者が通院下で長期間治療を継続する時代となった。一方で、治療の複雑化や経口抗がん薬、支持療法の多様化に伴い、副作用マネジメントや服薬支援を継続的に行う体制整備の重要性が高まっている。特に乳がん領域では、内分泌療法や分子標的薬を含む長期治療が中心となることも多く、病院薬剤師と薬局薬剤師の連携による患者支援が求められている。

大阪医科薬科大学病院は、がん診療連携拠点病院として多職種連携による集学的がん治療を推進しており、薬剤師も外来化学療法や支持療法、副作用管理に積極的に関与している。また、外来がん薬物療法の安全性向上と治療継続支援を目的として、化学療法センターにおいて薬剤師外来を運用している。薬剤師外来では、治療開始前から患者面談を実施し、レジメン説明、副作用説明、服薬アドヒアランス支援、支持療法の提案などを行っている。また、治療継続中も患者状態を継続的に評価することで、有害事象の早期発見や処方提案につなげ、安全ながん薬物療法の実践に取り組んでいる。

さらに、外来がん治療においては地域薬局との連携が極めて重要である。当院では、トレーニングレポートを活用した情報共有に加え、病院薬局連携研修会の取り組みを通じて、地域薬局との顔の見える関係構築を進めている。特に乳がん患者では、内分泌療法やCDK4/6阻害薬など長期内服治療への移行後、地域薬局が継続的な服薬支援や副作用確認を担う機会が増加しており、病院と薬局の役割分担および情報共有体制の整備が重要となる。

本シンポジウムでは、当院における薬剤師外来の実際の運用や、乳がん薬物療法における病薬連携の取り組みについて紹介する。また、専門医療機関連携薬局や地域薬局との連携を通じて、患者が安心して外来治療を継続できる体制づくりについて考察し、「がん治療のバトンを地域でつなぐ」ために病院薬剤師が果たすべき役割について議論したい。

【略歴】

- 2005年 名城大学薬学部 卒業
- 2007年 名城大学大学院薬学研究科 修了
- 2007年 草津総合病院（現：淡海医療センター）薬剤部 入職
- 2009年 大阪医科大学附属病院（現：大阪医科薬科大学病院）薬剤部 入職
- 2014年 日本医療薬学会 がん専門薬剤師 取得
- 2022年 大阪医科薬科大学病院 主任薬剤師
- 2023年 日本医療薬学会 がん指導薬剤師 取得
- 2025年 博士（薬学）（近畿大学・論文博士）取得